

## 日本語における女性差別

ニコラ・ゴドフリー

日本では、仏教と儒教の影響で、家長制度が数百年前に発達しはじめた。その時から日本の女性は男性に比べると目下の立場に置かれた。男性に対して、女性の服従と敬意が期待されてきた。この期待は日本語のすべての部分に反映されていると思う。女性が使う男性と異なる言語にも、女性に関する漢字や言葉にも、女性の社会での下位の立場についての思想が見られると思う。ほとんどの国と同じように、社会は一般的に男性側から見られている。(教育でもマスコミでも)言語も男性側から見てつくられたものだから、女性に対する差別語がある。

最近、英語には差別語の削除を望む人々の圧力によって、言い方の変化した言葉がある。例えば、前にテグストなどでは、三人称について言及する時、いつも“he”が使われていたが、最近、このかわりに“he and she”という言い方がもっと使われるようになってきた。しかし、ここにも見られるように“he”が先行している。“she and he”という言い方はほとんど使われていない。私は日本語にもこんな慣習があると思う。「男女」という言葉は一番よい例である。「女男」という言葉はない。同様に「夫婦」という言葉はあるが「婦夫」というのはない。両親のことを「父母」と言うのは普通であるが、「母父」というのは、現今の国語辞典にはない。しかし、古語辞典では見つけることができる。明治維新とともに、男性上位の考え方が完全に社会にいきわたり、こういう言葉が中止されたからである。

「先に男性」の言葉だけではなく、ある女性と男性について言及する言葉でも、男性を意味する漢字しか使わない。「兄弟」というのは一つの例である。兄と弟だけではなく、姉と妹でも「兄弟」という。そして最近まで「父兄」という言葉もあったそうである。意味は学童の保護者である。私は子どもの世話を実際にみているのは母親であると思うが、その母親の役割は認められなかったのである。まだ、辞典で見つけられるが、だんだん使わなくなっているそうである。こういう言葉の慣習は又、日本の社会を反映していると思う。つまり、男性はほとんどの状態で先行していて、女性はその後にくるのである。昔は夫婦はこういう風に歩いていたそうである。「三步下がって師の影をふまず」ということわざはこの考え方を具体的に表していると思う。やはり、今は夫婦は並行して歩いているが、男性が先行する例もまだ見られる。ほとんどの学校では出席をとる時、男性の名前が先に呼ばれるし、学校の式で男性の学生が先にホールに入るそうである。

もう一つ気になる差別的な言葉は「女だてら」だと思う。この言葉は女性が女性である

(2)

ために、あることができない、又はするべきではないと暗示しているからである。最近、次のような文が有名な作者によって書かれたそうである。「娘は女だてらに大学で数学を専攻した。」それによって女性が数学を専攻するのは不相当だと暗示している。これは、図々しく差別的な暗示であると思う。専攻を選ぶ時、自分の性が決定に影響するべきではないと思う。しかし、日本では「性」は決定に、重要な要素となるようである。専攻を選ぶとき「性」は、その決定となるべきではないと思う。その人の能力や興味が一番大切だと思う。しかし、日本では「性」が何を勉強するかに影響する。女性はたいてい女性らしいと思われる学部、例えば、秘書学、教育などを選ぶ。広島大学でも文学部は女性の方が多し、教育学部の言語に関する学科（日本語教育など）でも女性の方が多し。反対に、工学部では女性のまったくない学科もあるそうである。女性が科学や数学を専攻するのは女らしくないと思われるのだと思う。その上、会社もそういう女性をあまり採用しないそうである。なぜかというと、女性は結婚すると仕事をやめると思われているので、なるべく低い給料でやとえる短大卒等の女性の方を優先してとる。特に今年の日本は不況で、「女性」という理由だけで、会社は女性をやとわないそうである。こういう差別的な政策や「女だてら」のような言い方が、完全な「男女平等」を邪魔している。女性が、あることができない、又は、するべきではないという意見は、男性がより優れているという考え方を強めると思う。

会社といえば、普通の年でも、女性が会社にやとわれるために、能力より美貌の方が有利なようなのである。就職戦争は女性に特にほげしいので、前に、仕事につく機会を増やすために美容外科で手術を受けた女性がいたそうである。女性が外見的美しさが重要との思想はいろいろな言葉にも見られる。「美人」というのは、やはりいい例である。英語と同じように美人という人は、一般に女性である。男性の場合は「性」を明白に記さなければならず、「美男」を使う。このことは、上で討論した世界が男性側から見られていることに関すると思う。男性は見る側で、女性は見られる側という社会的な関係があるようである。テレビでも、広告でもこれが見られる。たばこやジュースなどのたくさんの宣伝でも、服を着た女性を使っているのは少なく、肉体を見せるものが多い。そして、何の本屋へ行ってもその種の雑誌がいっぱいである。

「美しさ」だけではなく、若さも、女性に有利なことのようである。「クリスマスケーキ」という言い方がこれを示す例である。25歳以上のまだ結婚していない女性が「クリスマスケーキ」と呼ばれているそうである。本物のクリスマスケーキが12月25日がすぎるとだれもほしくないことと同じように、女性が25歳になるとだれもほしくないそうで、こういう言い方が生まれた。つまり、25歳以上の女性は結婚していないと役に立たないということの意味するようである。こんな考え方が、やはり性差別である。女性は、家庭だけではなく、外でも役に立って、いいことをしているが、こういう言い方が、彼女たちの成功を否定していると思う。ここに、又、女性の主な役割が「良妻賢母」だという思想は明

白だと思う。最近、新しい内閣の大臣についての新聞記事で、一人の女性の田中真紀子の家族についてしか述べられなかった。田中が「妻と母親なので、夜は働かないことにしている」と明言した。これは、典型的な女性の描写の仕方だと思う。つまり、女性はよく家庭的な文脈で定義されている一方、男性はだいたい、彼ら自身として、定義されている。やはり、家族を育てるのは大切で、いいことであるが、女性のやる義務ではないと思う。女性が「家にいるべきだ」という考え方が上のような言い方のお蔭で強められていると思う。常用漢字の中で、女という部首を使う字が多い。これらの漢字も女性についての伝統的な思想を示していると思う。つまり、女性は男性より目下の者で、一生の目的は結婚したり、子どもを育てたり、家族の世話をしたりすることだという考え方である。これらのことや、女性の性格への願望が漢字には、よく反映されていると思う。

「女」というのは、女性の服従的な立場を表している漢字の一つである。元来、「女」という字は手をつけて、ひざまずいている女性を示した。この姿勢は服従だと思われる。一方で、「男」という漢字は、誰が見てもわかるように、田と力からできている。すなわち、男性は畑で力を出す人だと思われていた。又、これらの対比した漢字は伝統的な男女についての思想を表している。つまり、男性は世界の活動的な人（畑でも、政府などでも）であるが、女性は受動的だと思われた。実際はどうであろうか。最近、女性はいろいろな分野に活動的に参加している。政治での存在は、そんなに強くないが、「アジアの女たちの会」や「日本婦人会議」というような会の政治上の影響が70年代から、だんだん増えている。こういう会からの圧力のために、男女雇用機会均等法などの法律が制定された。そして、仕事を持つ女性も増えている。特に、私はおもしろい帽子を被っている60代のおばあさんが、公園などで一生懸命働いているのをよく見かける。そして、女性の伝統的なお母さんとしての役割は、受け身だとは言えない。よく知られているように、一般的にいうと、日本のお母さんは子どもが成功するように、よく積極的に働いている。

女性の「受動性」や、やさしさについての思想は、次の漢字にも反映されている。「妾」という字は手が女の上においてある絵からできていて、「委」と「奴」の「女」の部分は学者によると「従順」を表しているそうである。「嫉妬」というのは一つの知覚された女性の逆の特徴を示している漢字である。女性はよく「ねたましい」とステレオタイプで印刷されている。同様に「鬪」というのは、ほとんどの女性が「誘惑する女」だという逆の知覚を反映して、「~~女~~」という字は女性がみんな「おしゃべり屋」だという思想を表している。このような女へんを使う漢字のせいで、女性の否定的側面のステレオタイプが増強されている。

女性の主な役割が「良妻賢母」だという思想が、結婚に関する漢字に反映していると思う。こんなの漢字のなかで、ほとんどは女の部がある。一番使われている「結婚」をはじめ、「嫁にやる」「婿にやる」などである。「嫁」というのは、特にいい例だと思う。見られるように、女と家が示されている。つまり、女性が結婚したら、家にいるべきである。

(4)

日本の女性が使う日本語は男性ほど断定的ではないことも、女性の日本での社会的立場を反映していると思う。女性は男性よりやさしく従順だと期待されていたので、一般に呼ばれる「女性語」という日本語は「男性語」に比べると、もっと丁寧で、独断的ではない。男性語はもっと強くて、権威的である。

女性はもっと尊敬語を使うべきだという考えがある。例えば、「お」と「ご」をもっと使うべきだ。ある物にはもっと上品な言い方を使うべきである。腹のことを「ハラ」ではなく、もっと丁寧な「オナカ」という名前で呼ぶべきである。男性は命令をする時、目下の者に例えば「聞け」という風に言っても許されるが、女性はこういう「乱暴な」言い方を使ってはいけなくて、もっとやさしい「聞いて」とか「聞きなさい」を使うべきである。それから、男性が「ゾ」という断定的な終助詞を使いながら、女性がたとえば「わ」というやさしい助詞を使う。

私は日本語を習い始めたころ、友だちと話している時に「食う」という言い方を使ってしまって、みんなをすごく驚かせた。その前は彼らが「食う」という言葉を使うのを何回も使うのを聞いたことがあったので、どうして、そんなにビックリしたのか不思議に思った。やはり、「食う」というのも乱暴な男性の言葉なので、女性が使うと変な感じがしたそうである。他の外国の女性もこんな経験があったそうである。古屋和雄というアナウンサーが、いろいろな、日本男性と結婚している外国の女性にインタビューをして、彼女たちも「男性的」な夫がよく使う日本語を使ったら、回りの人をびっくりさせることがたくさんあるそうである。一人は「お」と「ご」をもっと使うように、「食う」や「行くぞ」という言い方を使うなと言われたことがよくあるそうである。女性の行為についての伝統的な思想が、女性が使うべき言語に見られると思う。「男性語」を使うのは乱暴で女らしくないと思われるようである。女性が受け身で従順なはずだという思想がそれに見られる。私は、怒りを示す時や自説を主張する時で、女性が「男性の言葉」を使うのを聞くことがたまにある。「女性語」のなかでこういう断定的な言葉がないことは、女性が断定的であるべきではないという思想を明示していると思う。

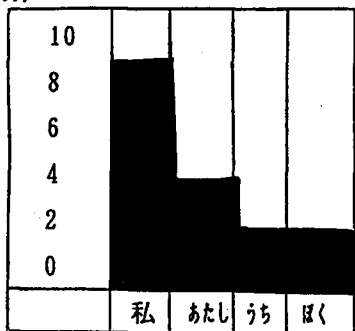
現在の若い人々が使う日本語はどうであろうか。女性は、もっと男性的な言語を使うか。それなら、どういう感動をあたえるか。同様に男性が「女性の言葉」を使うと、どういう感動をあたえるか。こういう疑問を25人の広島大学生にアンケートできいた。その中で15人は女性で、10人は男性であった。年は19歳から23歳までであった。

私が読んだ本によると、最近自分のことを男性的な「ボク」と呼ぶ女性がいるそうであるから、この人たちにどういう呼び方を使うか最初にきいた。

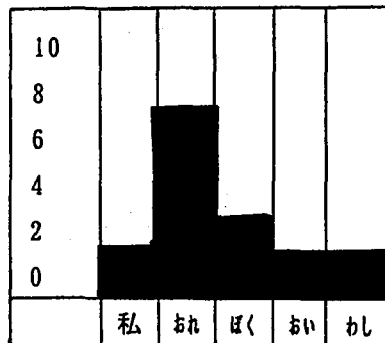
図1. 女性が自分を呼ぶ時に使う言葉

図2. 男性が自分を呼ぶ時に使う言葉

(人数)



(呼び方)



グラフでわかるように「ボク」を使う女性が一人いる。この人は「私が男性的なので使う」と言った。

女性が「オレ」か「ボク」を使うのを聞いたことがあるかどうかを尋ねた。9人は全然聞いたことはないと言った。残りの中で、1人は「よく聞く」、15人は「時々聞く」と答えた。この中で、ほとんどは「オレ」か「ボク」を使う女性は、小学校か高校の学生だそうである。そして、使う理由は流行なのだそうである。いろいろな日本人とこういう「流行」について話し合った。多くの場合は、この女子が大人になったら、「わたし」か「あたし」という慣習的な呼び方を使うのに戻るか、戻るべきだと思っている。

ある言い方が若い女性に使われてもよいという考え方は、女性が20歳ぐらいまではある行為が認められるという思想と対比されていると思う。例えば、「お転婆」という女性は20歳になったら、気を落ち着けて、「普通」の女性になるべきだそうである。そうしないと、「男まさり」だという無礼な言葉で呼ばれるそうである。

「ぜ」という男性的な終助詞が女性に使われることがあるかどうか知りたかったので、これをきいた。困った時に何というか。「困ったなー」「困ったぜ」「困ったわ」のうち、ほとんどの人は「困ったなー」とこたえた。しかし、1人の女性が「困ったぜ」と答えた。こういう「困ったぜ」が女性に使われたら、他の人がどう思うかきいた。ほとんどの人は「変である」「乱暴な感じがする」と言った。他の人は、冗談で使う感じがするそうである。同様に男性が「女らしい」「〇〇わ」という言い方を使うと、ほとんどの人は変であると感じたり、おかまっぽい感じがするそうである。

女性が男性的な「腹へった」というのを使うかどうか知りたかったので、お腹がすいた時、何というかきいた。図3が女性、図4が男性の回答である。

(6)

図3. 女性

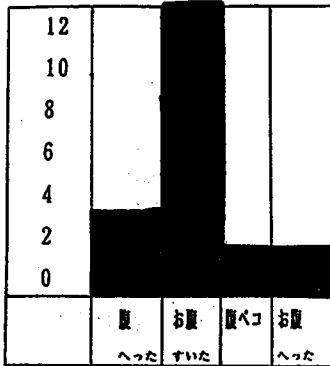


図4. 男性

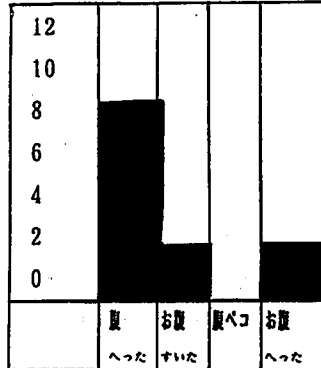


図3と図4から、ほとんどの女性がもっと丁寧な「お腹すいた」というのを使い、3人が「腹へった」を使う。女性が「腹へった」と言ったら、どう感じるかときいた。25人の中で13人は、乱暴な感じ、男っぽい感じがするようで、5人は冗談だと思おうである。残りの7人は普通だと思ひ、別に変な感じがしないそうである。そして、男性がもっと丁寧な「お腹すいた」を使うと、どんな感じがするかときいて、ほとんどのひと(17人)が普通だと言ったが、7人はちょっと変な感じや弱々しい感じがすると言った。残りの1人が「カマっぽい」感じがするそうである。

「お金」を使うか、又はただの「金」を使うかときかれて、女性のみんが「お金」を使うとこたえ、すべての男性はただの「金」を使うそうである。

女性に怒るとき「男っぽい」言葉を使うことがあるかどうかをきいた。11人は「はい」と答えて、4人は「いいえ」と答えた。この男っぽい言葉の中で、こんな言い方が出てきた。「あんた」「ぶち～」「～じゃろう」「どっかにいけ」等である。

このアンケートの結果から、女性が使う日本語と男性が使う日本語は、まだけっこう違うようである。つまり、まだ女性がもっと丁寧な言い方を使い、男性がもっと乱暴な「男らしい」言い方を使うのである。しかし、「男性的な言葉」を使う女性もいた。特に怒った時、「男性的な言葉」を使う女性が多かった。これは、私が持った思想を支えると思う。つまり、「怒り」のような感情を表に表すのに、いわゆる女性語が不足している。反対に、男性語は断定的で自説を主張するのに適当である。これは、女性が受け身で従順で、男性が断定的で、優勢だという認識を反映していると思う。区別と差別のちがいが、時に、見分けにくい。女性と男性はやはりちがう。このちがいがあるために女性語と男性語がちがうと言える。「女らしい」ことは、下位であることと同じではない。しかし、自説を主張するのは女らしくないという思想があるようである。このような思想は女性が社会や政治でのもっと強い存在となるのを妨げると思う。断定的に自説を主張することができないと真面目に取り扱われないであろう。上のような差別的な言い方や漢字などが女性の本物の自由や、完全に平等な社会までの道を阻止していると思う。

## 参考文献

CHERRY, Kittredge 1987, WOMANSWORD; What Japanese Words Say About Japanese Women, Tokyo, Japan.

CONDON, Jane 1985, A Half Step Behind; Japanese Women Today, Tokyo, Charles E. Tuttle Co.

ENDOH, Orie 1993, Sexism in Japanese Dictionaries, Japan Quarterly Oct-Dec Vol XXXX Asahi Shinbun, Tokyo.

古屋和雄、1991、『心を結ぶ日本語』講談社

SHIBAMOTO, Janet S. 1985, Japanese Women's Language, Orlando, Florida Academic Press Inc.